

荒木牧人作 『僕のアルバイト白書』

< 前編 >

小室真ナレーション 僕は小室真。家から自転車で10分のところにある県立御国高校に通っている。今日も1年生の時から親友、木村恒次と学校に行くため、待ち合わせのコンビニへ向かっている途中だ。

僕の家は父、母、僕、弟の^{みのる}実の4人家族だ。朝はいつも男3人が母を忙しくさせる。8時にもなると、父は会社、僕は高校、実は小学校へ飛び出していく。母は毎日、父と僕にちゃんと弁当を作ってくれる。実は給食だからね。父は何でも会社の新しいプロジェクトとかで、この1、2年、やたら忙しくて、ほとんどまともに話していない。時々、おれたちのこと、どう思ってるのかな、なんて考えちゃう。母もこんなんで平気かなと思うけど、あまりクヨクヨせずに明るくしていてくれるのは、正直助かる。実は7つ違いの小4。今、サッカーに夢中だ。

(音楽) (軽快なテンポ)

ナレーション 6月に入り、やっとクラスのムードにも慣れ、そこそこ友達もできた。

木村恒次 あ、真！ 遅いぞ。

真 おはよう、おはよう。全く5分も待たせるなんてけしからんやつじゃ。

恒次 あなたのことです。

ナレーション 恒次とは、2年生になってクラスが分かれちゃったけど、ずっといい友達でいたい。彼と出会えたことは、いろんなめで僕にとって大きなプラスだった。彼には最近九条愛というガールフレンドができたが、彼女は今、僕と同じクラスだ。

恒次 じゃあな、真。またあとで。

ナレーション 階段を駆け足で登って昇降口に入っていく恒次の後ろ姿を見ながら、僕は1階の昇降口に入った。

(効果音) (終業のチャイム)

渋谷先生 今日の6時間目のLHR(ロング・ホームルーム)で、修学旅行のバスと新幹線の座席、あと見学して回る時の班を決めますから。

ナレーション そう、あと1か月と2週間もすると、修学旅行なんだ。場所は長崎。カステラの長崎、オランダ村の長崎だ。クラスの中には、わざわざガイドブックなんか買ってきて、念入りに見学場をチェックしている人もいた。

(効果音) (教室のガヤ)

渋谷先生 はい、静かに。班と席は決まりましたね？ で、これは修学旅行費用の集金袋です。人数分取ったら、隣の列に回して...

真モノローグ 7万8000円か...。土産代とか含めると、10万円超しちゃうかもな。

渋谷先生 じゃ今月の末までによくお願いしまーす。持ってきた人は、盗まれるといけな

いので、すぐ先生に渡してくださいね。じゃ今日はこれで終わりにします。号令。

(効果音) (教室のドアの開く音)

ナレーション 廊下には、ニヤニヤ顔の恒次がいた。

恒次 おお、真。終わったか？ 帰ろうぜ。

真 おう。部活は？

恒次 定休日～ 木曜日～は定休日

真 そう。じゃ帰ろうか。

ナレーション 道々、恒次は、僕にせがまれるままに、九条さんとのことを話してくれた。

恒次 そんな、愛のやつ、修学旅行2日目って夜の自由行動の時間あるじゃん。その時…。

真 「恒次君。あたしをどこかに連れてってえ」って言った。

恒次 まあ、そんなとこかなあ。(笑う)

真 このヤロー。ノロけやがって。いいよなあ、彼女がいるつつうのは、

ナレーション だが、とかく荒っぽい恒次が、九条さんに引かれるのも何となく分かるような気がした。彼女には、ほかの女の子にはない、何て言うか、「清そな」って雰囲気がある。どんな家柄なのかな。

その夜のことだった。ふと目を覚ますと、時計は1時を回っていた。トイレに行こうと、僕はあくびをしながらゆっくり階段を降りていった。1階の居間から明かりが差していた。父と母の話し声が聞こえる。僕は思わず足を止めた。

父 真悟 しかし…、やっぱりお前一人に家を任せるわけには…。

母 コリ子 大丈夫ですよ。わたしだって、まだまだ働こうと思えばいくらだって働けるんですよ。家のことは、真や実が手伝ってくれるし。

父 だが…。なあ。

母 あなたのなさることは家族全員のためなんですもの。悩むことなんてないわよ。安心して行ってきてくださいな。

父 そう簡単に言うけどな。もしだれかに何かあってみろ。

母 その時はその時。今考えてもしょうがないわ。

父 うーむ。

母 シドニーじゃ、国内のようにはいかないけど、2年も3年もかかるわけじゃないんでしょう？

父 …分かった。じゃあ明日、部長に伝えるからな。真と実には明日の夜、わたしから話しておこう。

ナレーション 僕は耳をうたぐった。母の口から出た言葉、「シドニー」。それって、やっぱりあのシドニーだろうか？ 父がシドニーへ？ 信じられなかった。僕の中にあった「父がいる」という安心感が、流れていってしまったような気がした。

2日後、父は東京をたった。

実 兄ちゃん、頑張ろうね。
ナレーション 何気なく実はそう言ってきた。多分、今僕が実に何か言うとしたら、同じことを言
ただろう。父が、子供の手から離れていった風船のように思えた。

真 ああ。頑張ろう...な。
真モノローグ 分かっている。僕がしっかりしなくてはいけないんだ。
ナレーション それから1週間ほど過ぎたある日。
校内放送 (フィルター音) 2年2組、小室君。2年2組、小室君。事務室まで来てください。繰
り返します。...

真モノローグ え？ 何だろう。
(効果音) (事務室のドアを開ける音)

真 失礼します。
渋谷先生 小室君！ 大変なの。お母さんがさっき交通事故に遭って。
真 交通事故! ?
渋谷先生 頭を強く打ったらしくて、意識不明なの。買い物の途中、スピードを上げたまま曲
がってきたスポーツカーに自転車ごと飛ばされたらしいの。今、お母さんは市役
所の裏にある病院...

真 (かぶせて) 知ってます。
先生 そこに運ばれたの。弟さんの小学校にも伝わっているはずだから、早く行ってあ
げて。

ナレーション 僕は自転車で、急いで病院に向かった。途中で息を切らして走っていた実も後
ろに乗せて。

医師 君たちのお母さんは、少なくとも1か月は入院しなくちゃいけなくなった。意識は
まだないが、安心しなさい。奇跡的に内部障害はなかったんだ。とにかく、お父さ
んがいないのなら、おじさんかおばさんにでも連絡しなさい。

真 はい。
ナレーション 足が宙に浮いているような、全体重が頭にかかっているような、そんな気がした。
おじさんとおばさんは秋田で農家をやってる。時期が時期だけに、向こうも忙し
すぎて手が離せないだろうと思った僕は、母と大の仲良しの隣の中西さんに相
談することにした。

中西知子 (電話フィルター音) そう。大変だったわね、真ちゃん。
真 ええ。でもホッとしました。“もしかして母が死んだら”って考えると...。
中西 (フィルター音) そうねえ。でも、ユリ子さんにはほんと、お世話になってるから、真
ちゃん、何でもおばさんに言ってきていいわよ。
真 助かります。じゃ、いろいろお世話になります。
中西 (フィルター音) はいはい。伸ちゃん、お父さんいないけど、実ちゃんのお兄さん
なんだから、元気出しなさいよ。

真 はい。それじゃ。

真 これで一安心。でも実。選択、掃除、ふる沸かし、買い物ぐらいは僕らでやるからな。

実 分かった。

ナレーション こんな時のために、母は僕と実の貯金通帳の中に、それぞれ2万円ずつ入れておいてくれた。僕はそれを全部引き出してきた。これからの生活費や、修学旅行の費用のこともあったからだ。夕方、中西のおばさんが訪ねてきた。

中西 真ちゃん。これ、シチューだけど、作ったから食べてちょうだい。

真 わあ、おいしそう。どうもすみません。

中西 いいのよ。でも真ちゃん。これから真ちゃんがお食事作るんだと思うけど、ちゃんとバランス考えて作るのよ。カップラーメンとかばっかりじゃダメよ。

真 はい。じゃこれ、頂きます。

実 わー、うまい！ これ、ビーフシチューかな。

真 そうだよ。ほんとおいしいね。

実 でもこれからの食事って、兄ちゃんが作ってくれるの？

真 うん。そのつもりだけど、中西さんに何か教えてもらおっかな。

実 それがいいよ。母さんのようにはいかないだろうけど、よろしくね。僕も手伝うから。あ、それからね、兄ちゃん。今度の日曜日に、僕、教会に行ってみる。

真 教会？ キリスト教の？

実 うん、中西さんに誘われてね。

真 へえ。中西さん、教会行ってたんだ。

実 うん。まだ行き始めて何か月もたっていないとか言ってたけど。

真 ふうん。

ナレーション サッカーしか頭にないと思っていた実が、何で教会なんかに行く気になったんだろう。そう言えば、中西のおばさん、前はよくご主人とケンカして暗い顔だったのが、このごろ何かうれしそうだ。教会って、何か人の心を変えてくれるのかもしれない。その時僕は、自分でもどうしてか分からないけどあの九条愛さんの顔をふっと思い浮かべた。

その夜、僕は郵便局から下ろしたお金を前につぶやいていた。

真モノローグ 旅行費用は7万8,000円。今、母さんが用意してくれていた貯金2万と実に借りるとしても1万。小遣いの1万円を丸々充ててもこれで4万円。あと3万8,000円足りないなあ。...

ナレーション 母がこんなに大変な時に、旅行費用のことなんか言えない。だれにも迷惑をかけられない。悩みに悩んだ挙げ句、僕は一つの決心をしたのだった。

< 後編 >

ナレーション 僕,小室真。御国高校 2 年。父の海外出張中に,母が交通事故に遭い入院した。そんな大変な時,間近に迫ってきた修学旅行の費用のことなど,だれにも言い出せない。そこで僕は決心して,アルバイトを始めた。それもだれの目にもつかないという条件のもとで。一生懸命考えた挙げ句,早朝のバイトにした。家から自転車で 5 分くらいのところにある書籍関係の倉庫で,トラックから荷物を降ろす作業をするものだった。朝 4 時から 6 時の 2 時間労働だったが,元来早起き経験の少ない僕にとっては,昼間の 6 時間労働よりキツイ気がした。バイトが終わると,弟の実が起きてしまう前に,大急ぎで家に帰って朝食の準備をしなければならなかった。その後,すぐに登校時間になる。

幸い母は,意識を回復した。中西のおばさんも,何くれとなく僕たちの世話をしてくれるかたわら,母を見舞って身の回りの世話をしてくれた。

中西 ユリ子さん,安心して。真ちゃん,家のことよくやってるわ。わたしも時々お食事届けたけど,庭なんかもきちんとして掃除されてて。

母 そう。よかったわ。

中西 ええ。立派ですよ,真ちゃんは。でも実ちゃんもよくやってるわ。そうそうこの前の日曜日に,わたしが通っている教会に来たのよ。一人で。

母 実が?

中西 ええ。誘ってはいたんだけど,まさか一人で来るとは思わなかった。「何で来てみたの?」って聞いたら「お祈りしに来たの」って言うの。「何お祈りするの?」ってわたしが聞いたら,「牧師先生と一緒に,お母さんのことお祈りする」って言ったのよ。

母 実が...教会で...。本当?

中西 必死に祈ってたわよ。よほど心配だったんでしょね。

母 そう。...それで,そのあとは?

中西 うん。礼拝にも出て,終わったら「来週また来るね」って言って帰っていったわ。

母 そう...

中西 牧師の九条先生もとってもいい方でね。わたしなんか心のモヤモヤが吹っ切れたわ。家の中のゴタゴタを皆主人のせいにしてただけど,だんだん自分の心の醜さも見えてきて...。いいわよー。ユリ子さんも今度ぜひいらして。

母 そうね。

ナレーション 僕は,その穂の学校の帰り,駅前の商店街で夕食の買い物をした後,ゆっくりと自転車をこいで家へ向かっていた。電灯の明かりに照らされて,電柱に立てかけられた看板が目にとまった。

真 「あなたは人生を考えてみたことがありますか? 今の生活に少し疲れていませんか? 春の伝道会にぜひいらしてください。御国バプテスト教会 牧師九条英雄」九条...

九条愛 わ！
真 うあ！ あ、あ！
(効果音) (ガシャーンと自転車の倒れる音)
愛 あ、大丈夫？ ごめんなさい。
真 何だ、九条さんか。ビックリした。
ナレーション そう親友恒次のガールフレンドの九条愛さんだった。
愛 悪気はなかったの。本当にごめんなさい。
真 うん、大丈夫だよ。
愛 ところで、何かうちに用？
真 え？ 用って？
愛 うちの看板見て、じっと考えているみたいだったから。
真 え？ じゃ、じゃあやっぱりこの九条英雄っていう人は...
愛 わたしの父よ。牧師なの。キリスト教のね。あ、そうそう恒次君、昨日うちでお祈りしていったのよ。
真 恒次が...？
愛 初めてお祈りしたのよ。随分熱心だったわ。
真モノローグ あいつが...祈った？ 何祈ったんだろう。
ナレーション 次の朝早くバイト先でのことだった。
真 積み荷、降ろし終わりました。
上司 そうか、じゃあ今日はもういいや。少し早いけど、上がっていいぞ。
真 はい。じゃお先に失礼します。...あ！
(効果音) (積み荷にもたれかかり崩れる音。)
ナレーション 僕は過労で倒れてしまった。度重なる労働と睡眠不足に、体がついてこられなかったんだ。気がついたら僕は病院のベッドの上で、実と中西のおばさんが心配そうに僕の顔を眺めていた。
中西 真ちゃん、お金なくて困ってたら、いつでもおばさん助けてあげられたのよ。
実 体、動かないいでしょ、兄ちゃん。
中西 このことはお母さんには言っていないから。もうバイトはしないでね。
真 はい。
ナレーション とは言ったものの、僕の胸の中には“何でこんな時に”という思いが詰まっていた。
真モノローグ あともう少しなのに、もうダメになっちゃうのか。
ナレーション 病院に運ばれて3日目の夕方、恒次が九条さんを連れてお見舞いに来てくれた。
恒次 やっぱり大変だったんだろ？ 一人でいろいろしなきゃいけなかったんだもんな。

真　　へへ。僕,体力ないから。

恒次　なあいつここ出られるんだ？

真　　あしたまで休んで,あさって退院。

愛　　あさってかあ。真君,でも無理しないでね。実君も元気でやってるから。

真　　ああ。そう言えば恒次。お前,九条さんの教会行って祈ったんだって？ 何祈ったんだよ。

恒次　ん,へへ,まあいいって。

真モノローグ
ナレーション　恒次はきっと,僕のために祈ってくれたんだ…。

　　なぜか,そんな気がした。

　　帰り際,九条さんは1冊の本を置いていった。聖書だった。僕は初めて手にした聖書を開いてみた。 初めに神が天と地を創造した。…」外に目をやると,夕焼けがハッとするほどきれいだった。

(音楽)　(明るい感じ)

ナレーション　退院の日が来た。僕は久しぶりに体を自由に動かすことを楽しみながら家に帰るとだれもない居間のカーペットに“大の字”に寝転がり,天井を見つめた。ふと修学旅行のことが思い出されてきた。

真　　あーあ。もう一步のところまで,一生の思い出の修学旅行に行けない。チキショー！

ナレーション　目頭が熱くなる。僕は目を閉じて,あふれ出る衝動を抑えた。意を決して僕は学校に電話した。

(効果音)　(電話の鳴る音)

真　　あ、2年5組の小室真ですけど,渋谷先生いらっしゃいますか？

渋谷先生　(フィルター音)あ、小室君？ 大丈夫？ どうなの？ 今どこ？

真　　今日退院しました。もう平気です。あしたから学校へ行きます。

渋谷先生　(フィルター音)層,よかったわ。明日辺りお見舞いにと思ってたところなの。いろいろ大変だったのよ小室君いなくて。

真　　あ、あの,先生。僕…今度の修学旅行は…。

渋谷先生　(フィルター音)そう、小室君、修学旅行委員だったでしょ？ 大変よ、明日から。

真　　そうじゃないんです。費用。修学旅行の費用が出せないんです。

渋谷先生　(フィルター音)え？ 何言ってるの,小室君。費用の7万8,000円は、もうお父さんが払ってくださっているわよ。

真　　え？ え？

渋谷先生　(フィルター音)　もう5月の三者面談の時、すでに払ってくださったのよ。何でも、「1か月後は海外出張してるかもしれないんで、今支払わせてください」って。

ナレーション 体中の力が一気に抜けた。

真 あ、あの... 父が... ですかあ？

渋谷先生 (フィルター音) 一体どうしたっていうの？

真 いやあ、それなら何でもないんです。どうもすみませんでした。

真モノローグ おやじが、あの忙しくてろくすっぽ口も利いてくれなかったおやじさんが、払い込んでいてくれたのか...

ナレーション 拍子抜けと安心感とうれしさが入り混じって、ひとりでに涙があふれてきた。病院で一部始終を聞いた母はこう言った。

母 そうだったの。余計な心配かけちゃったわね。父さんからは、たつ前に 旅行の時に渡してくれ」ってお小遣いも頂いてたのよ。

でも、今度のこともきっと神様のご計画なのね。神様は、信じる者にはすべてを益に変えてくださるんだ」って、中西さんが言ってた。わたしも、お父さんの留守中にこんな事になっちゃって、今度ばかりはガックリ来てたけど、中西さんに本当に励まされたわ。ほら、これ頂いて毎日読んでものよ。

真 あれ、聖書？ へえー。実は僕もクラスの九条さんからもらったんだ。ほら、恒次のガールフレンドの。

母 中西さんや実の行ってる教会の牧師さんのお嬢さんでしょ？ 中西さんに託して、わたしにもお見舞いのカード下さったのよ。ほら。

ナレーション きれいな手作りのカードだった。

(愛の声で) 神様は、耐えられない試練には遭わせません。試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。愛の神様が、一日も早く治してくださるよう、祈っています。」

真モノローグ 愛の... 神か...

母 わたしも退院したら、一度教会に行ってみようかしらね。

ナレーション そう言う母の顔は、ほんとにうれしそうだった。

真モノローグ よし、そんじゃ僕も行ってみるか。

ナレーション 心の中で、僕はそうつぶやいたのだった。

< 完 >